天狗の山道

天狗の山道

むかし、むかしなあ。小木、そうじゃなあ、今の諏訪のあたりのことじゃ。だあれも行かんような山ん中に、小さな村が一つきりあったと。ずい分貧しい村じゃった。

田んぼがひどくやせとってなあ、食うもんといやあ、村人がつくっとるちっとの米と麦。それに、わずかな野菜だけじゃった。それも少しずつ、分けちゃ食っとった。

そのうちに、村に病人が出たんじゃ。病人は、うわ言に、

「魚が食いたい。魚が食いたい。」

と、言った。川は、あるにはあったが、ときどき小魚がとれるだけじゃった。それより、大きな魚がたくさんおる大川がひと山むこうにあった。

けれども、なみのもんにゃあ歩けんようなけわしい道や、昼でも日がささんようなとこを通って行かにゃならなんだ。

それに、天狗が出るといううわさもあったんじゃ。そんで、魚をとりに行くようなもんは、おらなんだ。

けれども、そんなことは言っとれん。だれかとりに行くもんはおらんかと、さがしたところ、一人おったんじゃと。足のたっしゃな、力の強い若いもんが名のり出たんじゃ。

さすがに若いもんだけあって、たあんと魚がとれたんじゃな。腰にさげたびくを見ちゃ、ほくほく顔で帰りよった。

だいぶん歩いてあの山道にさしかかったときじゃった。急に木の枝がやかましゅうさわぎはじめた。

ゴーゴー、バサバサ、ギーシ、ギーシ。

若いもんは心細うなってきたんじゃな。目ばっかりの顔をして、タッ、タッ、タッと、小走りで帰りよった。

タッタッタッタッタッ。

あたりはくろうなってきて、若いもんは自分の足音をきいちゃ歩いとった。

そのうち足音ばっかりの中に、なんとのう妙な音が聞こえてきたんじゃ。それがだあんだん大きゅうなった時じゃった。

「カーッ……。」

「天狗じゃあ。」

若いもんは口をあけたまんま、どっか　と地べたにすわりこんでしまった。

「カーッ、カーッ。」

ますますぶきみな声がちこうなって、今にも天狗がとびだしてきそうに思えた。若いもんは水

をあびたように汗をかいたと思ったら、そのまま気を失なってしまった。

若いもんが目をさましたときにゃ、もうあたりはまっ暗やみになっとった。そして、びくの中にゃなんにもなかった。若いもんは、とぼとぼ帰っていったと。

村じゃあその若いもんの話が評判になったんじゃなあ。人がよるたんびにその話をしとった。その中で、話を聞いとった村一番かしこい男が、また魚とりに出かけることになった。

今度もたあんととれた魚をもって帰りよった。やっぱり風もないのに木が揺れたり、あたりが暗うなったりしたんじゃが、話を聞いとった男は驚かなんだ。けれども、しいんとなったときは、気もちが悪うなったとみえるのう、ふり返って見ちゃ歩いておった。

するとそのとき、突然聞こえてきたあのぶきみな声に若いもんは、腰をぬかしてしまった。

それでもかしこい男は、びくをしっかり腹にかかえてこういった。

「天狗さまあ、村で病人が『魚が食いたい、魚が食いたい。』といってまっております。どうか、みのがしてください。おねがいします。」

すると、天狗の声が聞こえんようになったので、若いもんはびくをかかえたまんまいちもくさんに村まで走っていったんじゃと。

それからも、時々魚をとりに行ったもんもおったが、天狗が出てくるといつも、

「病人のものだ。」

と、いって天狗をだまし、魚をもって帰ってきたそうじゃ。

金武陽子

野荒らし庄衛